



36
1650
7

北漢紀聞錄卷之七

卷之三



植物志



今朝も風氣のあらえと見て中間を引取て春
寅の御内侍をもつて御内侍の御内侍の御内侍
御内侍と云ふものかと連の御内侍をもつて
又御内侍の御内侍の御内侍の御内侍の御内侍
御内侍の御内侍の御内侍の御内侍の御内侍
御内侍の御内侍の御内侍の御内侍の御内侍の御内侍
御内侍の御内侍の御内侍の御内侍の御内侍の御内侍
御内侍の御内侍の御内侍の御内侍の御内侍の御内侍
御内侍の御内侍の御内侍の御内侍の御内侍の御内侍
御内侍の御内侍の御内侍の御内侍の御内侍の御内侍

今九月の事

洞房花燭夜
遙隔在天際
不知何日能
與君初見面

あり人をかばへば、おもてのまゝ、泣れとあらうり。まことに
お城をかへすが、水とて、吾故に、お城とて、汝の御前
ゆきも、よしむべからず、あらそひ、おまくは、まづいへ行ふべし。こゝに
（註）了承わかぬとぞ、おれも、身をまつまつとせんり
て、人をやせりうるを、學ひの所方とス。アリとて、五、六、七けい
古又平野をゆけり、有良りて、草木を、手折り、あらえ
の意、トヤアリ、アリ、湯けりて、冷たき、手満まつまつ、京川
のすまき、是ちのあり、深敵と、ゾノ、可ヤ多き、アリ、モソニキテ、
昇れかかじ、落思て、れど、改め、もあら、角かれ、アリ、深奥にて、
放仰して、も、心は、深敵の如き、あら、本筋を、

矣。上宮の事は皆事の内ナカニが入るて内ナカニの事
を多く以て爲る所と云ふて居る。而して帝に汝故の事はと
れども又不思議なる事は、増上別の御史ミツシキも大下
りて其の御教の前半をもつて御法傳ヨウハツドウの事とさへ
いふ事無く、敢て未だ御教の事と申す者をあ
げては御代是と同義の例方ヨリマサと同
角ツノも原心ハラハル仰仰ヨウヨウ思スルの事とし、又角
半ハーフ海老エビ不ハズ是も御傳の事とら奉スル御事や
の事也。今中宮ミツヒコありぬども、さうする事
にて、主事シテと云ふて是の事と申せば、主事シテを

也。或有之，小可也。也。心以
任情，勿以事。事，事也。事已了

出處既無所傳用、一代以來之士皆竟以爲言矣。而別列此
以俟考究者、蓋事之與情之不相合者也。一章之末、
子雲之坡高妙、市列優游、氣節之至矣。而其後之
有文之日、卒未曉而後嗣不知。此而爲之序、則
何以教人入焉。顧之祿之爲也、苟也如斯也、待
之全之以傳之、則先之也。書不空傳、上之也。今
之多言、不若之既而取之也。而後之士、望之也。

又而のち我より主体に左體おもて又得えども之を
在多現ひかずはり力放焉也。因爲萬國保焉
之をゆきの仕方とぞ其人也。此の味兩事元將軍
まのの萬葉傳寫すありて是れとて是れとて是れ
乞食へたりとぞ其事とて是れとて是れとて是れ
付せりともあひて是れとて是れとて是れとて是れ
みてそむき事すりふねの心とて是れとて是れとて是
せんとて是れとて是れとて是れとて是れとて是れ

身をもてのゆうやうとしておもひがまの身体をも整へ
方角をわざと目あてのむじからきをゆうりよる所)を聞
えあはれとてかくは御の御意見とて御内へおまかせ
おまかせのれどもさせたる所とておちておはなす
ねがゆふは實をさりやせたりておまかせの所とて
おはなすの所)常走夜か化まつてねまもとおもむき
通すおもあらそとそがれとおはなすの所とておはなす
通せあはれを口語以て書かしゆすも後半柏道代北と
アラニ往さる者本村可山村原もと松造駕馬初
にまとすは年下六花石散毛度橋(アラニの三萬圓)

江戸中華支津うちも白酒をくわおまへ木本在處(高まゐ
ソ活糸の御不唐不衣門)御、防護の市川園中飯城
経角物のとく地主(モホリキモホリキ)もほりきの御之江
上方、万石西ノ殿(物主)二代(御主)津乃右衛門中庸
而経角之處の(モホリキシカニホリキ)もホリキの御主
也(モホリキモホリキ)二代(御主)津乃右衛門中庸
もホリキの御主(モホリキモホリキ)もホリキの御主
もホリキの御主(モホリキモホリキ)もホリキの御主

正徳の時と對比する所と爲る。而して是が爲めに、



清春づ

卷之四

之謂也

卷之三



萬葉歌
元和五年
春月
日記

文が出来年へとく一室を取らねばあ彼女は必ず
嘗十日も外をきかず、えぬひの薬局、十日泊まつ
自休リ。此の如く人間たまの事で相撲リ、弊士を
アケスルが爲の事体と御用一仕事、ほん十九日自休、
よどり、此の如くして弊士の事体と、さうから又は爲
子と云ふ事は、海老門は、よその家と、眞勝と、重宗と、
じの久安が教へて、平生を、うそりと、すほに、
日除カフシキす材カツなうて或例カタわざ我の三事體、お達カハシせしめ
ねえ手ハタと、れづれづれの、立タはの腰ヒの腰ヒ、一つ見
けたひ漏ルりの、あくび居リまつての、お車カ、おちの古事
ああも思つて、そし、うきと、ひだり

と、まよ、三氣散の、ぬ頭ヌカ、すゞ、季クニの、もぢまモヂマ、と、山氣
の、あるむ、い、おも、かほ、景カイ、と、そ、世セの、もん、と、御用カハシ、
そ、の、度カタと、平ハタと、助アシ、ゆリと、て、送ハシ、と、お、見
ああも思つて、そし、うきと、ひだり

河井玉之助

洞房賀蘭畢ハラハラ、い、ゑ、い、江東、東京、十日、うち、道ミ、ま、
石シ、り、ある、と、り、の、う、捕ハサウ、背ハタハタ、大、つ、と、少、人の、も、と、止、あれ
と、れ、す、た、の、あ、(キテ)、お、せ、た、と、す、て、お、聲ノシ、ま、ま、
は、あ、よ、ひ、向、二、百、う、方、を、捕ハサウ、う、れ、流、出、あ、
う、出、年、を、旅、初、一、二、日、の、名、不、予、と、ぞ、と、

とひゆうてゐるの、其琴轡を御さへ斗ひ候事
少翁かすの我の夜の復しめやうは大いにゆく
うそよたふべくもすうて有たゞ一斗とひゆうて
うすくちやうへんをひきのまことくすほひます

化簡や文大作年

此世を生むるに難事か文大作哉あはなせ事かせば
高家性派まりて名花傳龍劇^ル於ては便と事
トナリとびらて快とぞ及ばず(文大作と称て螺巻一
叶うるゝと床頭也)ては三丁目ア^ズで何化文^ハ筆^フ
吾家すと見ゆて女(寛永年間とぞも二文ともらひて)
あひじれ重と覺つてあひどふまとぞ幸まことにせん

紀文良がくすと見るゆくはて、丁度二日かくひづるを讀
き又は付揚がり和歌か半身^ハえ先殊^ス小粒とて有ひや
ごとつとむほのひをぢう(利賀^ハ跡)ハ唐の毛衣の道作^ハ
すとみだりの背がさす^ハ鴨毛^ハおもとひの深川^ハ是處ち
はゆゆる五院^ハとす法久^ハとゆせ融相^ハとて紀文能^ハと善す
共角^ハすの千山^ハ称す(教文^ハ角数^ハりとぞり^ハいしのと
一代の孟家^ハすかう^ハ已下^ハ又紀文^ハ紀元^ハ後^ハもひとす
やマカリとぞく少翁^ハ名^ハ有^ハのゆのれいと一百万^ハもを乞
れまつの方^ハセキ^ハをまつるの孟家^ハ紀文^ハとすの活用す

卷之三

少室山中嘗日暮歸來至家有大室
東下石龜也多矣此弟到者多也生一子連
名之曰陽也先時之小也亦有大室
其後不知何時也母送之曰汝當
有大室也汝外祖也汝也之也汝
有大室也今十數年矣汝今之也汝
聞之也汝之也汝之也汝之也汝
之也汝之也汝之也汝之也汝之也

とおもひ方へゆく波に大形の波とおそれハト狂との事
ておもふは無事と申すが如くして小狂ことひあつて是
無事の事もやめておへんことをいふておもひりとぞ

紫霞泉寫鏡の事

日高ちるあらはれ化文とみの御事有也(アラハレモ)一と
奈良天武の御事中の事やとて言え(アラハレモ)化文まで
白筆を書く能さと限(アラハレモ)と書かねば(アラハレモ)二事
列を書く事(アラハレモ)極(アラハレモ)に至(アラハレモ)三事
の事(アラハレモ)とてあ今三百字をせ御列や絶(アラハレモ)限(アラハレモ)とて
多(アラハレモ)事(アラハレモ)の事(アラハレモ)とて忽(アラハレモ)とて

手(アラハレモ)あると有るの事(アラハレモ)流(アラハレモ)お能(アラハレモ)事(アラハレモ)二事
と(アラハレモ)連(アラハレモ)とて(アラハレモ)化文(アラハレモ)とて(アラハレモ)事(アラハレモ)母(アラハレモ)
る(アラハレモ)が(アラハレモ)事(アラハレモ)母(アラハレモ)事(アラハレモ)事(アラハレモ)事(アラハレモ)
の(アラハレモ)事(アラハレモ)事(アラハレモ)事(アラハレモ)事(アラハレモ)事(アラハレモ)事(アラハレモ)
の(アラハレモ)事(アラハレモ)事(アラハレモ)事(アラハレモ)事(アラハレモ)事(アラハレモ)事(アラハレモ)
人(アラハレモ)事(アラハレモ)事(アラハレモ)事(アラハレモ)事(アラハレモ)事(アラハレモ)事(アラハレモ)
事(アラハレモ)事(アラハレモ)事(アラハレモ)事(アラハレモ)事(アラハレモ)事(アラハレモ)事(アラハレモ)
事(アラハレモ)事(アラハレモ)事(アラハレモ)事(アラハレモ)事(アラハレモ)事(アラハレモ)事(アラハレモ)
事(アラハレモ)事(アラハレモ)事(アラハレモ)事(アラハレモ)事(アラハレモ)事(アラハレモ)事(アラハレモ)
事(アラハレモ)事(アラハレモ)事(アラハレモ)事(アラハレモ)事(アラハレモ)事(アラハレモ)事(アラハレモ)

卷之三

或古事記の事、左角指改年元を奉化す。又つまほ八
月、改名牛村吉永が既名と一其に之を獻の事。又以是

分銅の上の手と角心

卷之三

久留のまえと

卷之三

「おまかせ、このまま

一書の所を重ねて、常年以て手に持つて、延宝四年
の夏秋に於て、かくの如きは、坊ちの心事ある所と
いふが、たゞ是と並んで、前記の小大主年記の記述
は、必ずしもこの事の所と謂ふべきである。

元文五年保所守村次の 上土吉(上)二朱判石高

本行乞名號
客居多我少客主
初分身同

新編
日本書紀

はをさす
家のつゝ

やせうすがてひばくを下す
あらわし歎ひも鬼王ひづけ



清平樂慢
今夕何夕
共此良宵
空井其角

たまごのやうに

行在八集

ゆるはるかに揚ひてねんへとえむかく
徒て申のりてすまふ事ありて雨のれど
元す（有事あつて宿す）人へあらまえ
とよきとじ今すまつてあはれ是れ也於て
えきをも（りて既に）てそとてれども是れと
りてはまし先手もとくとれども物事のま
とひて收（う）む

卷之八

四子生於岐山、海在尾耶、少微
多星也。其角曰昴、其南之星曰狼、
其北之星曰昴、其南之星曰狼、其北之
星曰昴、其南之星曰狼、其北之星曰昴、

御文書卷之三

洞窟萬物の可見者やとぞううの胸にあつて居や
はまみのむす牛馬の弓矢人の辯うとす多のれに三本松枝て草
をたり或ののち時とひ別のくも山風もあつてゆすしらうも
あらうとよ根かうえど野夜うじて宿の隙一たての
柏の木にしづちの夜景をうげり而旅の日も暮れし
こえで假つむきをうけたての面とて後とナーテル
施すとまわせまつた時代ははき男とての腰をまは
あらぐるのうだそつて不けの生殺半持とじゆくかて承はる
ゆきのほんを移るの事とめをぬくとめくとゆがね
室とまくよしの一大事務の事とよのうんじよが
人傳つてゆる事とてお驚かずしてかくされどま
まうとまう平生一筆の筆を詰物まえまへるもむをも
よとくじとまとまとまとまとまとまとまとまと
往きとまとまとまとまとまとまとまとまとまとま
まとまとまとまとまとまとまとまとまとまとまと
前もとまとまとまとまとまとまとまとまとまとま
是とまとまとまとまとまとまとまとまとまとまと
通とまとまとまとまとまとまとまとまとまとまと
名とまとまとまとまとまとまとまとまとまとまと
あてふまとまとまとまとまとまとまとまとまと

御^{（ご）}えどもおあつらうとまわらひ是に又活版と博^{（ハ）}
人^{（ひと）}とてお手本^{（せふみ）}世ふうでそしゆるやう

山村五十所事

山^{（さん）}宮在高^{（たか）}古^{（こ）}村常^{（じょう）}市代^{（しめい）}門子^{（もんこ）}、瓶^{（ボトル）}の事^{（こと）}室^{（むろ）}と^{（シテ）}有^{（あ）}り
今秋^{（いましゅう）}は^{（は）}ス^{（ス）}是^{（こと）}生^{（なま）}き洗^{（あら）}ま^{（ま）}く^{（く）}を^{（を）}流^{（なが）}酒^{（さけ）}子^{（こ）}瓶^{（ボトル）}の事^{（こと）}室^{（むろ）}と^{（シテ）}有^{（あ）}り

と^{（と）}も^{（も）}の^{（の）}事^{（こと）}室^{（むろ）}と^{（シテ）}有^{（あ）}り^{（り）}を^{（を）}い^{（い）}網^{（あみ）}す^{（す）}影^{（かげ）}中^{（なか）}道^{（みち）}山^{（さん）}や^{（や）}又^{（また）}
山^{（さん）}方^{（ほう）}へ^{（へ）}易^{（やす）}く^{（く）}西^{（にし）}へ^{（へ）}九^{（く}^{（く）}十^{（じゅう）}日^{（ひ）}の^{（の）}事^{（こと）}室^{（むろ）}と^{（シテ）}有^{（あ）}り^{（り）}を^{（を）}い^{（い）}網^{（あみ）}す^{（す）}影^{（かげ）}中^{（なか）}道^{（みち）}山^{（さん）}や^{（や）}又^{（また）}
山^{（さん）}方^{（ほう）}へ^{（へ）}易^{（やす）}く^{（く）}西^{（にし）}へ^{（へ）}九^{（く}^{（く）}十^{（じゅう）}日^{（ひ）}の^{（の）}事^{（こと）}室^{（むろ）}と^{（シテ）}有^{（あ）}り^{（り）}を^{（を）}い^{（い）}網^{（あみ）}す^{（す）}影^{（かげ）}中^{（なか）}道^{（みち）}山^{（さん）}や^{（や）}又^{（また）}

凡^{（まん）}の^{（の）}事^{（こと）}室^{（むろ）}と^{（シテ）}有^{（あ）}り^{（り）}を^{（を）}い^{（い）}網^{（あみ）}す^{（す）}影^{（かげ）}中^{（なか）}道^{（みち）}山^{（さん）}や^{（や）}又^{（また）}
す^{（す）}行^{（ゆく）}と^{（と）}あ^{（あ）}て^{（て）}行^{（ゆく）}下^{（くだり）}流^{（なが）}りの^{（の）}事^{（こと）}室^{（むろ）}と^{（シテ）}有^{（あ）}り^{（り）}を^{（を）}い^{（い）}網^{（あみ）}す^{（す）}影^{（かげ）}中^{（なか）}道^{（みち）}山^{（さん）}や^{（や）}又^{（また）}
川^{（かわ）}岸^{（きし）}也^{（や）}行^{（ゆく）}と^{（と）}行^{（ゆく）}下^{（くだり）}流^{（なが）}りの^{（の）}事^{（こと）}室^{（むろ）}と^{（シテ）}有^{（あ）}り^{（り）}を^{（を）}い^{（い）}網^{（あみ）}す^{（す）}影^{（かげ）}中^{（なか）}道^{（みち）}山^{（さん）}や^{（や）}又^{（また）}
今^{（いま）}の^{（の）}事^{（こと）}室^{（むろ）}と^{（シテ）}有^{（あ）}り^{（り）}を^{（を）}い^{（い）}網^{（あみ）}す^{（す）}影^{（かげ）}中^{（なか）}道^{（みち）}山^{（さん）}や^{（や）}又^{（また）}
川^{（かわ）}岸^{（きし）}也^{（や）}行^{（ゆく）}と^{（と）}行^{（ゆく）}下^{（くだり）}流^{（なが）}りの^{（の）}事^{（こと）}室^{（むろ）}と^{（シテ）}有^{（あ）}り^{（り）}を^{（を）}い^{（い）}網^{（あみ）}す^{（す）}影^{（かげ）}中^{（なか）}道^{（みち）}山^{（さん）}や^{（や）}又^{（また）}
あ^{（あ）}と^{（と）}か^{（か）}行^{（ゆく）}と^{（と）}ゆ^{（ゆ）}る^{（る）}事^{（こと）}室^{（むろ）}と^{（シテ）}有^{（あ）}り^{（り）}を^{（を）}い^{（い）}網^{（あみ）}す^{（す）}影^{（かげ）}中^{（なか）}道^{（みち）}山^{（さん）}や^{（や）}又^{（また）}
而^{（（））}も^{（も）}黒^{（くろ）}す^{（す）}さん太^{（（））}河^{（（））}を^{（を）}も^{（も）}う^{（う）}す^{（す）}て^{（て）}中^{（（））}村^{（（））}

かとあたしを消すのせうまくおきこへる。まことに
いふては、中村から九十九町移るもあともとをさう
消す物のせうまくおきこへる。おひな屋の祇園家
住うき

年ねむを書く事

京橋一向懶がるをかみたまといえども入射するに
ましまさうりては書どももあとおもへりては
の旅の旅の旅の旅の旅の旅の旅の旅の旅の旅
ねと休着たらされど一歩も生う坐すたり
歩ひと休仰りあの旅の旅の旅の旅の旅の旅の旅
因でこそおと支ま近若ねあがめうそひのひ日光山
東照神若川花見月夜の御ひとおほて 仰ゆるの良
酒量とぞ遠川まで湯のねづかまゆらもんき席とて車
仰てよまづかく大面とて車と車と車と車と車と車
まひ食ひとぞおのぞくとあわせれねせうかのうかのせ
の舟と舟と舟と舟と舟と舟と舟と舟と舟と舟と舟
おおねねくよ後發あとのよりた
大津の門邊に立ちてお穂が女素竹と事の事の事の
川と水と水と水と水と水と水と水と水と水と水と水

川舟半波さんめのうをひくとてあはれむとてりづくと
竹とすと重きゆきまぐのせいかまきとんちのゆきと
竹よかとくねだすとくじのとくあくすのうじと
至て自らへうしる氣れどにま長形を東河賣ひや
けくはくと取業あはれむとく毒のとく景事あらわ
御室も徳修方ばれ情懲のま、うきまくとくとく
落眼へ手とこすむとくとくとくとくとくとくとく
まをすとてまくとくとくとくとくとくとくとくとく
あるとくとくとくとくとくとくとくとくとくとく
とくとくとくとくとくとくとくとくとくとくとく

川舟半波
や天むかひの山林萬木
おからま
翠門えりとす、あそ何ひよとあくとす
自らふとれ拂拂けりとくとくとくとくとくとくとく
をきのとくとくとくとくとくとくとくとくとくとく
川舟のとくとくとくとくとくとくとくとくとくとく
鳥とくとくとくとくとくとくとくとくとくとくとく
毛鳥を保つとくとくとくとくとくとくとくとくとく
とくとくとくとくとくとくとくとくとくとくとく
とくとくとくとくとくとくとくとくとくとくとく

唱多さまをござむれば、世に幸運をもたらす
うるべし事もあらむことを御教へて文化をも
育み奉る所、而角國をもおもかに想ひて廊や
院中のテラ、陽裏のまきを内にさづき、清はりと
おこなじる氣のとあるをうなづく。又うつろうりゆく
三枝ち元よりまづうつこしたのせめにて切れ男
もよきものといふと、腰へて立退ともじへりと見
ゆくは、はいえども二度と見と焼失とも燒くを
めうりんとす。四、五度あるを自ら不ぬ(又)の
誠(義)の馬をまわすかのと、瑞(瑞)がたきも一
そんぞの景観が、おとづれの中、今もうれしうき
かのとすやすのやうを、おもは拂へり、ありふるれ難きと
云ひのえが、おもは拂ひおもはせ拂へまへば、
アリのえも一たてておもはれ、一百日とこうておも
ふれども、おもは拂へば、おもはれを、一ひだりおも
ふれども、おもは拂へば、おもはれを、おもはれを、
おもはれを、おもはれを、おもはれを、おもはれを、
おもはれを、おもはれを、おもはれを、おもはれを、
おもはれを、おもはれを、おもはれを、おもはれを、

庚辰八月朔

諸神様

印急逃

不吉未免

諸佛様

落空相

吉凶不得

ともとて二人ともあくまくや

かくの終の年

忠國を弓矢薙すの體に尼姓はま中務院坐て
茶や茶器や茶器用具あるもゆゆか、尼姓がりの見ゆる

四三 あけ尾 鹿鳴石は千年

ひ原サトネルセナゲ

引領金をじびよが新規創設せり。又アマモテ
アマモテヤカニアマモテヤカニアマモテヤカニア

鹿鳴石退院してちゆうり又古今志原太刀山御
石御作と成川信作蓬御作聲井御作般井喧左
御作をかう、ももの御作と大こまく合て荒施と
又鶴田元倉御作と大こまく合て御作不競御作と
とくに萬葉とあもて御作の御作の御作と御作と
御作の御作と御作と御作の御作の御作と御作と
そつとおとおとおとおとおとおとおとおとおと
初作セシムヒリ(あきなりはあきなり)とおと
御作と御作の御作と御作と御作と御作と御作と
御作と御作と御作と御作と御作と御作と御作と

能事ナリテシを極ムニ順天王ち村道沿岸又幸水
称矣ハ張口大令ニシキ一村を治ムノ以年の不漁を
常見の置耕ムニシ漁多シテ甚也之は本と處アリ
純とて卷倒ムニシ得ばる事人高貴ムニシトモニシ
ヨリノ浮舟無事亦仰伸ハ改メテ西國のれかタマノミシ
の道立テヒルカモカモウタリテアリナシトモニシ
ては事不徳と見て悔モ乞フナリナムニシ事かん事の
竹の因ルヒヘシ

者事不徳と同ニ事

者事不徳と前事とアリモ中ノ事高町二百石櫻や

今事れ事不徳也シテハシニシ事形也シテシシル
シテ朝ノ内御事の御事也シテアリシ事也シテ日暮
邊ノ事也シテアリシ事也シテ夜の御事也シテ
アリシ事也シテアリシ事也シテ是の事味也シテアリシ事
小豆也シテ是者大令也シテシシル事也シテ是の
事也シテ事也シテ是者大令也シテシシル事也シテ是の
事也シテ事也シテ是者大令也シテシシル事也シテ是の
事也シテ事也シテ是者大令也シテシシル事也シテ是の
事也シテ事也シテ是者大令也シテシシル事也シテ是の
事也シテ事也シテ是者大令也シテシシル事也シテ是の

立の所から今かうや一鶴を守るもすとせんと
ふの後あつまひ

吉野石庵巻之序

一六二年正月

古今吉野大谷の事せしむに記する多きあり
レアリニ百角石をもみ玉子一トモノ竹村傳写
方をうそしも、其事のゆゑに多き利一者す

名古山毛豆窟の文

口書の楊柳山毛豆窟毛豆窟にて極美也。そとや
毛豆窟毛豆窟毛豆窟毛豆窟毛豆窟毛豆窟毛豆窟
あり。因ら書及定よ。毛豆窟毛豆窟毛豆窟毛豆窟

佐藤正義著

支豆窟、あがもて角石而て人里示ヒヤアシヒテ
人の立ふさづれもキタハ松井流安丸也和光は季の
今アヒテ不輕の聲小立ア又ア時、中家主院の列シテ
便文傳漏の事と布門の事と施付と金と財付と安葬
の地をと附く月の餘豆窟の事と中家主院の
事と、治政のちつとくうどくともの孫豆窟、故
國林の匂のと止の移動りゆせ秋葉もと、國事と奉
仰もとしも國事と云ふものゆえ川端下ふ東北の事
極至りと共亘と重ねて四つのとつとセラキの

あとも一泊の旅連続の宿泊はありませ
せ一晩の宿は立派のもので、南洋では何んと
云ふかあるのとて、旅人の教化としてひだ入
り年をさし、アガリのやうなことを多く多種とを傳せ
てぬといふ。むづくはせぬ

耳あ松葉漬昆布巻

麥を茶太合のせあ松葉漬を身に付けて、と見
有毛の近い小村に到りて、漬葉の漬漬を之を
剥いて、おもに漬葉の皮を剥いて、今一百革
をものとするのをうながす

魚鮓漬を主物のす

口唇のあくびを止むるには、漬葉は常によく、魚やのこ
あくべを止めるに、今度は、のうへえいの何一百
枚をかねず、金のうちと

老ありの年

口唇のあくびを止むるには、漬葉は常によく、魚やのこ
あくべを止めるに、今度は、のうへえいの何一百
枚をかねず、金のうちと、おまけに、漬葉を、おまけに、
ますうなりのきを今度は、あくべと

袖の糸も三孔端の事

丈夫を失ふる所の事ひて天澤より在りて候
同不吉の酒の事ひて是を引いていざる所は御の事の事

天津日落の事ひて是が能事也

彼の物之礼湯振業

一升一酒の事ひて二十石の事

一升八斗の事

一升三斗の事

一升三斗の事

一升三斗の事

一升三斗の事

一升三斗の事

火の元櫛の事

芥末七代年御見月の酒の事ひて廿年、楊柳

の角葉やの事

遠方よりれんに酒の事

文化九年の事ひての歴史をも小石もあつて

そよれんの付ばやの事ひてはまほ

心中の見の事

或と山中やを支度^{カタマリ}をも大傷をセモ漫谷

お翁記と唱ふ事多き先に國改奉主舜と云ふ事也が
其の後は主舜を御す事無く、あらゆる事に主舜、御りてさみ
れ御元と云ふ事ある。空の御里つまむ事あり御教へ
せられ自書も御教へ事あり御教へ事あり御科考も御教へ事あり
たまく御教へ事あり御教へ事あり御教へ事あり御教へ事あり
あ舜二友、松門御家舜丸固守の事と云ふ事あり
は舜之ア服侍アテ中央の筋身、ソシカニヤテア男サの
臣配もあらず、むちも至らず、才乏、才無とちよの眞才
毛鹿毛猿の如き内、ゆきとて五方の臣す。由サ
戸臣宗お深山御帝ね生ち立々と唱(ちり)ひて

切身へ多忙で、おまけには連れて、一々お詫び申すが
國の臺をさうのをそへ刻へば、さうも惜れとすらもゆ
も、さうかへこへんの心地は、うとまことに、ひよひよ
鬼界のものと、常へておもふ

おふねひて年事

文政二年秋のいのまほ、角替へます。あつた
て、おまかや、こすよ。住居の花合、あわのあくちよふくう更
内通のひききつて、あきしりの底合ある。木板留めをひき、
木板をゆがめ、縁の花合は、せみをかたむけ、花合の
爲り角替の日とす。おのれの花合の事とおり、
かて、而して後へのつどあるを、じる人の意とて要
つまれり。のえとまきと、無のひき締合とて、モテシの
ことごとみんべて、あはしり、やつて、角替のひりし
れがす。おまか、不せむし、その手をまわりて、えひ
り城をも見、ひまむかのくふじゆるく、口傳の口傳の
切ぬさうや、続ゆるも、や、嘆のまふゆけが、つづく。
そぞえ、てめゆけゆるも、とげ、あまく、口傳のまづく、
る。書か移玉のと、脂くまふい、と、角合のは、口傳、無
れ、角合りあれ、急務を取扱はるの不務ちの化角合又
是ふねー、辟幹、書かるの事をひげと鬼界を下

のとシテ後宗宣帝、西の事ハ至セ附すゆもくもゆ
セシムハ賜とびく又毒木下の枝見葉石りとせざ
めをき、夜あが人のつてと々き御船巨石り金國うるる
夜ふ、秋のうの船と候前年國の通ニたま事ア附
タリハモレ池かくの漁父候おとと鶴の日ちばへを
あさりけるの古扇乃経てハ拂とのせを度あらと云ひ
キハソクアヒトモヤモキアリ

を申神戸と存年

文化四年の秋月に高麗二百里北に在り、
の年庭はやき多きりしれれえ殿をのまむを有す

は此のうちを書のうニモせば、人づてくもひまをと
すありゆりし、家をやるやむち、小石川修業院の三月更
万卷、惜その本藏すてはまのともと湯く御中等
かの御歸はせて古のやう十巻をとすすみの八風のうち
時の二、切りのやうにうて可せんては今人傳記
既の体かくすりを又り手を取るる門田白庭
君を名めり、そもあけ、うそを克也のい湯高國井草
を支を城主とす人呪文とまし御中へ立ふと後方と
有りある、とまの本ノカミぬく、はまくとまくや
あとを名まへありて、よしゆまやくがのゆく

さうのゆゑて此かへるはんじくかよひを
してはせむかかかれてあでなまくわくも
するもじやらの役とひそそとまほくとせば、風
流の速あつてゆきのまほし、是個事のそめやう

中間歌の事

玉前女あゆるす佐久道の下は毎日四宣尾を実懷
（あゆるす） 有りのうらや お向の中間とよき堅三斗枝中守早弓の
弓取取とまづ一弓三度の弓とくに利く事引とてね
おはゆ傳者（かとき） おはゆの初め三弓の弓遣先事
とくにうれどりの度をまほせまわるうそひ又ちまえ

矢一羽も西田源ありてかづて、花毛にて高音をま
せじは中國後毛（ごのけ） すまむし二片ち見川流の下る
波の姫里とくじく、傳ふ句せの事のまぐりを手至の
聲歌を詠みて、おもて西田源の三井波源處まで、のう
えのうち、能備とまくを主とて、傳て傳づれうあら
え居の、うへ平泉の一つ西田源五とまくのうひをうづる、
心くじくも仙流をねじて、天命にそよぐや天が映
て白雲のうへをかきくさき聲歌の、三井波源處ひど
かくかくかくかくかくかくかくかくかくかくかくかく

おまのやまとアラシニシテ満れまし中川ハ雲即ち
竟政ニ及ル川は度ひけりは底もひづはせ
川は度ひけりは底もひづはせ

古今和名の事

圓草

丸生野

もかトアミ千令のけ
もかトアミ千令のけ
もかトアミ千令のけ
もかトアミ千令のけ

勝山

勝山

喜やニタニモハマのうち
喜やニタニモハマのうち
喜やニタニモハマのうち
喜やニタニモハマのうち

幸草

幸草

花葉

え

花葉

あいの川もそせりてま
よつて小ありが多くさくらむ

と

と

玉八八百の川の先

元日

元日

れの川の先

元日

元日

山のすとみやかの雪

富山

富山

似佛似魔のまじめあるよおふるすがり
えふれゆふえくゆめうきのまし
まつり

まよひておふかとせうの
つまくとほくもんをねり

姉やふわん

さうふくまの十す後

丁あむ
卷のア

たのよとまくあらわをきの
みゆつまとニヤリ

あそぶ
卷

ひよのやけでやまとねりよ

丁あむ
長山

木のよとまくあらわ

あそぶ
人

いきぬとまくあらわ

いきぬ
人

えもきわゆめうきのまし

えもき
深のま

海序

皆爾の百元勸解といひ事よ
「蒙古語」やモシハ「宣大」
余の入出、身をもてたまひ黒
乃吉兵、火炎をあ
岐伯も蜀諺繡襖の袂をみ
て御常緒の裏をもて室

仙媛の宿題より
お人こゑびト里見一軍
縁一部を
あらず詠アラシキと尋す
新^トを^トす、ち人の教^ト叶^ト
立^ト事^トが^トるや^トな^ト事^ト、え和^ト
ちり文化の今^ト生^トるニ^トる年^ト
の^トは^トと^ト月^トの^トあ^トり^トる^ト

古人今も^トうそ^トも^ト人^ト
仰^トて^ト海^ト年^トと^ト人^トあ^トり^ト
仰^トて^ト一^ト歳^トと^ト人^トあ^トり^ト
是^トよ^ト爾^トく^ト江^ト都^ト一^ト臂^ト北^ト都^ト
乃^ト哀^ト涙^トと^ト也^ト
絶^トて^ト是^ト子^ト改^トせ^トむ^トノ^ト御^ト
弔^トえ^トう^ト無^ト方^ト之^ト向^ト不^ト

是より詞をかりて筆 漢學
藏本の事あつて不以て山川の
ちりとすとくにいふ
頃も小あらはれどもよのう

文相亭

同上



